

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380922

研究課題名(和文) 発達障害を持つ子どもの母親の就学期における感情プロセスの理解とその支援

研究課題名(英文) Understanding and support of mothers with children with developmental disorders during the transition to elementary school.

研究代表者

高橋 靖子 (Takahashi, Yasuko)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：20467088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、母親の育児感情、共感性、知覚されたソーシャル・サポート、そして子どもの行動特徴が育児態度に及ぼす影響の検討である。就学移行支援教室に通う子どもを持つ母親195名を対象に質問紙調査を実施した。子育て感情尺度の因子分析を行ったところ、3つの因子が抽出された。次に、受容性と統制の高低群を組み合わせることで子育て感情、サポート、共感性、子どもの行動得点について分散分析を実施したところ、応答性・統制が高い群は、他の群より他者指向的反応と視点取得が高いことが示された。発達障害の子どもの母親は統制的な養育態度が指摘されるが、むしろ適応的であり、統制と応答性のバランスで捉える必要性を示した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the effects of mothers' feelings towards child rearing, empathy, perceived social support, and the child's behavioral characteristics on their attitudes towards child rearing. A questionnaire survey was conducted for 195 mothers of children who required support training for elementary school. The factor analysis for the emotional scale for transition to elementary school yielded three factors. We then performed variance analysis on feelings towards child rearing, support, empathy, and children's behavioral scores by combining high and low groups for responsiveness and control. The group with high responsiveness and control, had higher other-oriented responses and viewpoint acquisition, compared to groups with lower scores. Thus, mothers of children with developmental disorders were more likely to show controlling child-rearing attitudes, but also showed adaptiveness and tried to create a balance of control and responsiveness in this study.

研究分野：臨床心理学

キーワード：就学支援教室 発達障害 母親の共感性 子育て感情 育児態度 ソーシャルサポート

1. 研究開始当初の背景

幼稚園・保育所（以下、幼保）から小学校に入学する時期は、「小1ギャップ」と呼ばれるような学校不適応が子どもに顕在化しやすい。同時に、親としても今後の子どもの成長への期待や不安の相反する感情を抱く時期であり、学校生活においては望ましい対人関係の持ち方、生活習慣や学習態度等に関する親の養育への要求水準は高くなる。さらに、経済的負担の増加や延長保育から学童保育への移行や、職場における責任の増加等の学校内外の環境の変化も大きく、心理面および環境面での再適応が課題となる。しかし、移行期における親の子育て感情に関する研究は数少なく、どちらかという育児ストレスや育児不安といった子育て感情のネガティブな側面に焦点づけられ、ポジティブな側面の検討が少ないことが課題である。幼保への就園期に関する研究は、初めての子どもの社会生活であることから比較的注目されてきた（山本ら、1991）。しかし、子どもの発達障害等の問題は就園後に気づかれることも多く、就学前は比較的充実した療育体制であっても、小学校への移行によって円滑な引き継ぎがなされにくい。さらに、親は就学先の選択や療育や行政機関との連携を求められ、就学後の子どもの学校生活についての思いを一般の親と共有することが難しい等、心理的負担の増加が予想される。親の感情は状況に応じて変化し、「時には心配だが、希望も感じている」「自閉症というだけでなく、何より自分のかわいらしい子どもだ」とポジティブな思いを寄せ、子どもをありのままに受け入れ愛情を再確認するなど、徐々に整理されていくことも多い。その一方で、子どもを望ましい状態にしようと事細かな指示を出すなど、子どもの世話に没頭して過剰に行動をコントロールしようとする姿もときにみられる。本研究では、発達障害を持つ子どもに対する親の心的状態を理解する一つの視点として、「多次元共感性」（鈴木・木野、2008）を取り上げる。多次元共感性とは、他者の思考や感情を理解しようとしたり、その結果何らかの気持ちや考えたり抱くこと（共感性）について、認知的および感情的に理解するだけでなく、共感的な理解や反応が相手と自分のどちらの視点から生じたものなのかという指向性（他者指向－自己指向）を考慮した概念である。先行研究より、他者指向性が強い人は外向的であるのに対して、自己指向性が強い人は対人関係で緊張しやすく、生活満足感が低く不快感情経験が多いことが報告されている（鈴木、2012）。それらの結果より、母親の自己指向性が強い場合には子どもの客観的な理解が妨げられ、周囲の多様な援助を受け取りにくいことが予想される。

2. 研究の目的

就学期における発達障害を持つ子どもの

母親を対象として、子育て感情・態度および多次元共感性との関連より、子どもや家族・友人、周囲の援助者などの親密な他者および自己に対して抱く感情や態度について明らかにする。

3. 研究の方法

保育園年長および小学校1年生の子どもを持つ母親に、小学校生活について不安に思うことや期待することについて面接を実施する。それらの面接内容から、小学校移行期における子育て感情に関する項目を新たに抽出し、研究者で内容的妥当性の検討を行う。新たに作成した項目を、既存の子育て感情尺度に追加して尺度を作成する。そして、市の就学移行支援教室に通う保育園年長および小学校低学年の子どもを持つ母親に質問紙調査を実施する。事前に作成した子育て感情尺度と子育て感情に関連する要因として、子どもの問題行動、子育て感情、知覚されたソーシャル・サポートを尋ねる予定である。そして、それらの要因が母親の子育て感情や態度に及ぼす影響因について多変量解析によって明らかにする。本研究の調査対象は、就学移行支援教室に参加する子どもの母親であるため、1年間あたりでは多くの参加者が見込めないため、3年間横断的に教室参加時（年長時）の調査を実施し、それぞれのコーホートについて小1時までの2年間（計2回）にわたり縦断調査を行うこととする（本報告書では、横断調査についての結果を記載する）。

4. 研究成果

(1) 小学校移行期における子育て感情に関する項目の作成

小学校への移行期特有の母親の子育て感情を抽出するという目的により、小学校1年生の母親2名と保育園年長の母親1名に対して半構造化面接を行った。

語られた内容を箇条書きにしてまとめ、移行期特有の子育て感情と捉えられる項目について、臨床心理学を専攻する大学院生8名と教員1名により整理・検討を行い、新たな質問項目を作成した。

最終的に、移行期における子育て感情尺度について、荒牧（2005）が作成した育児感情尺度16項目に、予備インタビューで得られた11項目、およびその後の研究者らの話し合いによって2項目を加え、計29項目の尺度とした。

(2) 就学移行支援教室に通う年長児の母親への質問紙調査

①目的

小学校入学の時期は、子どもだけでなく保護者においても新しい環境に適應できるかどうかの分岐点（crisis）である（山本・ワップナー、1991）。特に、発達の遅れのある子どもを持つ母親は、大きなストレスにさら

され、精神的不調をきたしやすい。また、その子育てにおいては統制的な態度が指摘されている(田村, 2015)。このような育児態度に対して、子どもの実際の行動特徴や周囲からのサポートが影響を及ぼすと考えられる。さらに、母親自身の育児に対する感情、および他者の感情理解に関連する共感性による影響についても取り上げる。

本研究目的として、療育教室に通う年長児を持つ母親を対象に、小学校への移行期における子育て感情尺度を作成する。また、母親の療育教室および幼稚園保育園からのサポートの知覚が、子育て感情、および共感性、知覚されたソーシャル・サポート全般に及ぼす影響について検討する。さらに、母親の子育て感情、共感性、知覚されたソーシャル・サポート、そして子どもの行動特徴が育児態度に及ぼす影響について検討する。

②方法

調査対象：「就学移行支援早期療育トレーニング教室」に参加している年長児の母親 195名である。同様の教室を主催する複数の自治体の協力を得て質問紙調査を実施した。

母親の平均年齢は 36.4 歳 ($SD=5.3$)、そのうち 151 名 (78.6%) が職に就いていた。

子どもの平均年齢は 71.4 か月 (5 歳 11 か月相当, $SD=3.8$) であり、男児 151 名、女児 40 名、第一子 115 名、第二子以降 77 名である。何らかの診断名(疑いを含む)がついている子どもは約 15%であった。

調査時期：2014 年、2015 年、2016 年 10 月頃に教室のスタッフより質問紙を配布・回収された(縦断調査であるが今回は初回のみ分析する)。

調査内容：質問紙の構成を以下に示す。

a) デモグラフィック変数：母親の属性(年齢、最終学歴、就労状況、就労形態)、子どもの属性(年齢、性別、出生順位)、家族構成、教室への来室経緯

b) 子どもの行動尺度(24 項目 4 件法)：中澤・中道(2007)の下位尺度の一部(非社交、向社会、攻撃、被排斥、過活動・妨害)を用いた。

c) 小学校移行期における子育て感情尺度(29 項目、4 件法)：荒牧(2005)を一部改変した田中(2014)に新たに項目を追加した

d) 育児態度(13 項目、4 件法)：中道(2013)を使用した。応答性と統制の 2 因子からなる。

e) ソーシャル・サポート尺度(20 項目 5 件法)：加藤(2007)を一部改変して用いた。夫、夫以外の家族、友人・知人、幼保の先生、専門家の 5 つの各サポート源について道具・情報・情緒・評価の側面について尋ねた。

f) 多次元共感性尺度(10 項目・5 件法)：鈴木・木野(2007)の短縮版を用いた(木野・鈴木, 2016)。他者指向性、自己指向性、被影響性、視点取得、想像性の 5 因子からなる。

倫理的配慮：調査実施にあたり各自治体機関の代表に承諾を得た。調査依頼書と質問紙の表紙に、回答は任意であること、拒否や中断が可能であり、そのために不利益は生じないこと、調査内容は匿名化の上で統計的に処理されること、厳重に管理し責任をもって破棄することを明記し、同意を得て実施した。

③結果・考察

a) 小学校移行期における子育て感情尺度の作成 (Table 1)

子育て感情尺度 29 項目について因子分析(プロマックス回転)を行ったところ、固有値の減衰状況と解釈可能性より、3 因子が妥当と判断された。因子名は、“子育て不安・負担感” 8 項目 ($\alpha=.770$)、“学校関連不安感” 5 項目 ($\alpha=.688$)、“子育て肯定感” 7 項目 ($\alpha=.743$) である。前回調査(高橋・村中・木野, 2017)では 7 因子だったが、データ数が増えたところ 3 因子に集約された。また、田中ら(2015)は本研究とほぼ同じ子育て感情尺度を用い、保育園・小学校に通う一般児童の母親を対象に調査を実施し、5 因子を抽出している。田中らの結果と比較すると、本調査は簡潔な 3 因子構造となった。

b) 出生順位による差異

出生順位ごと(第一子および第二子以降)に、調査項目の子育て感情、育児態度・共感性、ソーシャル・サポート、および子どもの行動について t 検定を実施した。その結果、出生順位が早いほど友人サポートが低く ($t(176)=-3.45, p<.01$)、育児態度の応答性および学校関連不安感が高かった ($t(123)=2.54, p<.05$; $t(128)=1.75, p<.10$)。他の尺度では有意差がみられなかったため、以降はまとめて分析を行った。

c) 教室来所経緯と母親の子育て感情・態度および子どもの行動との関連

自身の判断による来所者は、他者の勧めによる来所者より、自身の視点取得が高いととらえていた ($t(188)=-2.12, p<.05$)。また、保健師の勧めに応じての来所者は、それ以外の来所者より、自身について統制的な育児態度を取りやすいと認識していた ($t(23.6)=-2.70, p<.05$)。子どもの行動については来所経緯による有意差がみられなかった。

d) 療育・園サポートが子育て感情および共感性、子どもの行動に及ぼす影響 (Table 1)

次に、療育・園サポートによる子育て感情および共感性、子どもの行動への影響について調べた。子育て感情に関して、療育・園サポート低群で子育て肯定感が低かったものの、それ以外で大きな差異は見受けられなかった。共感性の他者指向的反応および自己志向的反応、想像性において、サポート高群が他群より高いことが見いだされた。

子どもの行動については、被排斥において

サポート中群が低群より高い傾向が示され、過活動妨害において中群が高群より高かった（それぞれ、 $F(2, 170)=2.96, p<.10, F(2, 168)=2.48, p<.10$ ）。それ以外で有意差はみとめられなかった。

これらの結果より、サポートの受け取りの認識は、子育てに関する感情というよりは個人特性が強く関連していると推測された。子どもの行動特徴である被排斥について、母親は相談しやすい、あるいはサポートを受けられやすいものの、過活動妨害についてはうまくサポートを得られにくい傾向がうかがわれた。

Table1 療育・園サポートの高中低群によるソーシャルサポート、および子育て感情共感性得点

療育・園サポート	N	M	SD	F値	多重比較
ソ夫	低 24	3.20	1.23	2.41 +	高>低+
ー	中 124	3.49	1.04		
シ	高 21	3.89	1.00		
ャ	低 25	3.37	0.83	1.60	
ル	中 126	3.71	0.88		
サ	高 22	3.76	1.15		
ポ	低 25	2.70	1.13	4.29 *	高・中>低*
ー	中 124	3.20	0.80		
ト	高 21	3.38	0.91		
子育て	低 20	2.75	0.60	0.76	
不安・	中 82	2.63	0.46		
負担感	高 11	2.53	0.54	0.55	
学校関連	低 21	2.72	0.62		
不安感	中 82	2.79	0.53		
感情	高 11	2.62	0.58	2.83 +	中>低+
子育て	低 20	2.76	0.55		
肯定感	中 82	3.36	0.39		
	高 11	3.45	0.38	7.29 ***	高>低・中***
他者	低 25	3.74	0.69		
指向性	中 125	3.97	0.59		
	高 22	4.39	0.43	3.34 *	高>中*
自己	低 25	3.62	0.74		
指向性	中 125	3.34	0.82		
多	高 22	3.75	0.75	0.52	
次	低 25	3.02	0.70		
元	中 125	3.08	0.77		
被影響性	高 22	3.23	0.55	0.47	
共	低 25	3.48	0.77		
感性	中 125	3.65	0.77		
性	高 22	3.59	1.00	3.65 *	高・中>低*
視点取得	低 25	2.54	0.90		
	中 123	2.99	0.84		
	高 22	3.14	0.77		

e) 母親の育児態度を目的変数とする重回帰分析 (Table 2)

母親の育児態度を目的変数、子育て感情・共感性、ソーシャル・サポート、および子どもの行動を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した。

その結果、育児態度の応答性に対して、家族のサポートが正に関連し、母親の被影響性および子どもの消極性が負に関連した。また、統制に対して、母親の他者志向的反応、想像性が正に関連し、専門家や友人サポートが正に関連する傾向を示した。これらより、育児態度が子どもの行動特徴だけでなく、母親の他者指向性、被影響性などに関連することを示した。子どもが社会的でない場合には母親の応答性が引き出されにくいことや、母親の他者志向的反応が強いと、応答や統制共に積極的働きかけが増えることが推察された。

さらに、育児態度について、応答性・統制

の高低4群を独立変数とする分散分析を実施した (Table3)。その結果、応答性が高く、統制が低い母親は、子育ての肯定感が高い傾向がみられた。また、応答性および統制が高い母親は、他者志向的反応や視点取得が高かった。おそらく母親の他者配慮的であり客観的に思考する傾向が、子どもへの積極的なしつけにつながると考えられる。

Table2 母親の育児態度を目的変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法)

	応答性	統制
R^2	.321 ***	.127 ***
子どもの行動		
被排斥	-	-
非社交	-.217 **	-
向社会	-	-
攻撃	-	-
過活動・妨害	-	-
ソーシャルサポート		
夫	-	-
家族	.193 *	-
友人・知人	-	.173 +
幼保の先生	-	-
専門家	-	.167 +
母親の子育て感情		
子育て不安・負担感	-	-
学校関連不安感	-	-
子育ての肯定感	.180 +	-
母親の共感性		
他者指向的反応	.169 +	.286 **
自己指向的反応	-	-
被影響性	-.251 **	-
視点取得	.309 **	-
想像性	-	.277 **

*** $p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10$
有意な変数のみ記載

Table3 母親の応答性・受容性による各変数の分散分析

	応H	統H	応L	統L	F	多重比較
母親の年齢	35.7	39.1	34.9	38.7	4.72 **	LL>HH*, LH+LL*, HL+>LH+
子どもの行動						
被排斥	1.93	1.72	1.95	1.86	0.77	
非社交	1.92	1.67	2.16	1.97	1.80	
向社会	2.90	3.15	2.81	2.83	1.41	
攻撃	1.88	1.60	1.81	2.01	1.85	
過活動・妨害	2.84	2.48	2.55	2.74	2.06	
ソーシャルサポート						
夫	3.65	3.15	3.47	3.59	0.78	
家族	3.87	3.85	3.48	3.69	1.24	
友人・知人	3.24	2.87	3.27	3.00	1.09	
幼保の先生	3.84	3.67	3.68	3.56	0.70	
専門家	3.28	3.30	3.34	2.95	0.98	
母親の子育て感情						
子育て不安・負担感	2.66	2.35	2.52	2.70	2.23 +	LL>HL+
学校関連不安感	2.88	2.59	2.63	2.67	1.84	
子育ての肯定感	3.38	3.59	3.26	3.29	2.56 +	HL>LL+, LH+
母親の共感性						
他者指向的反応	4.24	3.75	3.89	3.78	5.45 **	HH>
自己指向的反応	3.55	3.25	3.31	3.29	0.94	LL**、HL*、LH*
被影響性	2.96	3.00	3.06	3.12	0.28	
視点取得	3.91	4.00	3.73	3.47	2.69 *	HH>LL+
想像性	2.82	2.54	2.89	2.66	0.80	

** $p<.01, *p<.05, +p<.10$

応: 応答性, 統: 統制 (例)HH: 応答性H統制H

本研究の結果は、発達障害の疑われる子どもの母親の統制的な育児態度が、子どもの状態像に応じた対応の一つである可能性を示唆する。実際に発達障害の疑われる子どもの母親は、行動制御を行う場面が多いとされる。しかし、育児態度について一側面、一場面で捉えることなく、統制および応答性とのバランスをふまえることが望ましいであろう。

また、家族以外の第三者からのサポートを受け取ることが、母親にとって適切な養育への助けだけでなく、心理的圧力となって子どもへの過度な厳しさにつながらないように、適切な支援について考慮する必要がある。

f) 今後の課題：縦断調査については昨年度末に終了しており、これから解析予定である。年長時から小学校入学後にかけての養育態度や子育て感情の縦断的变化を明らかにする。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

① 高橋 靖子・野々部 友香 (2018). 母親の養育態度と乳児期の気質が幼児の不安傾向に及ぼす影響：家庭の雰囲気を経介要因として 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 67(1), 167-174. (査読無)

② 木野 和代・鈴木 有美 (2016). 多次元共感性尺度 (MES) 10 項目短縮版の検討 宮城学院女子大学研究論文集, 123, 37-52. (査読無)

③ 高橋 靖子・瀬地山 葉矢・本城 秀次 (2014). 乳児の気質と母親の育児不安との関連：妊娠時の愛着表象を防御因子として小児保健研究, 73(3), 429-436. (査読有)

④ 高橋 靖子・村中 智彦・田中 嵩人・加藤 哲文 (2014). 発達支援教室に通う子どもを持つ母親の育児ストレスの実態調査 上越教育大学研究プロジェクト報告書 pp. 8-15. Retrieved from <http://www.juen.ac.jp/050about/050approach/030relation/project/files/1561.pdf> (査読無)

[学会発表] (計 12 件)

① 高橋 靖子・村中 智彦・木野 和代 (2017). 小学校移行期における母親の育児態度に育児感情と共感性が及ぼす影響—療育教室に通う年長児の母親を対象に— 日本LD学会第 26 回大会

② 村中 智彦・熊南 真人 (2017). PDD・知的障害児の集団随伴性による仲間への働きかけ(2)—機能の観点から— 日本行動分析学会第 36 回年次大会

③ Takahashi Y., Muranaka T., Tanaka T., Kise F., & Kino K. (2016). The relationship between child problem behavior and mothers' childrearing attitude for children who were being trained in

preparation for elementary school. 31st International Congress of Psychology

④ 高橋 靖子・村中 智彦・田中 嵩人・木勢 文香・木野 和代 (2016). 小学校への移行期における母親の子育て感情：療育教室に通う子どもの療育教室に通う子どもの母親を対象として 日本発達心理学会第 27 回大会

⑤ 村中 智彦 (2016). 共生社会の実現を目指す地域からの発信—学校教育と地域社会が目指すもの— (自主シンポ指定討論) 日本特殊教育学会第 54 回大会

⑥ 村中 智彦 (2015). インクルーシブ教育に向けた発達障害幼児の早期療育事業の役割 日本特殊教育学会第 53 回大会

⑦ 田中 嵩人・高橋 靖子 (2015). 母親の子育て感情が養育態度に与える影響—保育園年長と小学校低学年を対象として— 日本心理臨床学会第 34 回大会

⑧ 木野 和代・鈴木 有美 (2015). 多次元共感性尺度 (MES) 10 項目版の検討—原版と同様の分析を通して— 日本教育心理学会第 57 回総会論文集, 687.

[図書] (計 2 件)

① 高橋 靖子 (2015). スクールカウンセリングにおける支援—養護教諭や担任との連携 (本城秀次・河野莊子・永田雅子 (編) 心理臨床における多職種との連携と協働 岩崎学術出版社, pp. 85-98)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 靖子 (TAKAHASHI, Yasuko)
愛知教育大学・心理講座・講師
研究者番号：20467088

(2) 研究分担者

村中 智彦 (MURANAKA, Tomohiko)
上越教育大学・大学院学校教育研究科
・准教授
研究者番号：90293274

木野 和代 (KINO, Kazuyo)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：30389093